

## 主論文の要旨

緩和ケア病棟入院中で余命 3 週間程度と予測されている終末期がん患者の  
1 日の過ごし方に対する意思決定の内容

看護学分野

秋元 典子教授 指導

7 3 4 1 9 5 0 4

江口 瞳

秋元典子

本研究の目的は、緩和ケア病棟入院中で余命 3 週間程度と予測されている終末期がん患者の 1 日の過ごし方に対する意思決定の内容を明らかにすることである。緩和ケア病棟に入院し、余命 3 週間程度と予測されているがん患者 18 名を対象とし、参加観察法および半構造化面接法を用い、Krippendorff の内容分析により分析した。その結果、緩和ケア病棟入院中の本研究対象者の 1 日の過ごし方に対する意思決定の内容は、【時の仕切りをして、今日 1 日を生きるという過ごし方をする】【あらかじめ何かをしようとは決めず状況に応じた過ごし方をする】【体力が維持できるような過ごし方をする】【形あるものを残せるような過ごし方をする】【楽しみを取り入れた過ごし方をする】【つらさは家族以外の他者に吐き出して平穏に過ごす】【今も死後においても大切な人との絆を断ち切らないような過ごし方をする】【残された命を他者のために使えるような過ごし方をする】【人として尊厳ある過ごし方をする】、以上の 9 つの大表題に集約された。

# 学位審査報告書

平成 25年 7月 29日

岡山大学大学院保健学研究科長 殿

審査員

主査 谷垣 静子

副査 齋藤 信也

副査 近藤 真紀子

分野 保健学専攻 看護学

学生番号 73419504

氏名 江口 瞳

論文題目:

緩和ケア病棟入院中で余命3週間程度と予測されている終末期がん患者の  
1日の過ごし方に対する意思決定の内容

掲載誌名（巻，頁，年など）：日本がん看護学会誌（27(1), 4-12, 2013)

論文審査要旨:

本論文は、緩和ケア病棟入院中の余命3週間程度と予測されているがん患者の1日の過ごし方に対する意思決定の内容を明らかにした研究である。この論文の新規性は、余命が週単位と予測されたがん患者18名を対象に、参加観察法と半構造化面接法により質的に分析した結果、がん患者から短期的ながらも未来を志向して過ごしていることを示したことである。

余命数週間といわれているがん患者の研究はわずかであり、貴重なデータであるといえる。その貴重な生データを得るため、対象者の看護活動場面に参画し、参加観察法を用いられたことは評価に値する。一方、課題としては、看護支援活動の適応を考えた場合、対象とする終末期がん患者が不明確という点である。

以上、課題を含みつつも、本論文は、余命数週間のがん患者への看護支援の方向性を示すことができた。よって、総合的に判断し、本論文が、岡山大学大学院保健学研究科博士後期課程の博士号（保健学）に値するという結論に達したので、報告する。

最終試験

合

否